

【資料】

大学におけるスチューデント・アシスタント(SA)の有効性

— ピアノ初心者ゼミの事例を通して —

長 澤 希

Effectiveness of Student Assistants in University
— Through the case study of the Beginner Piano Seminar —

Nozomi Nagasawa

概 要

本稿の目的は、大学におけるスチューデント・アシスタント（以下SA）の有効性を探ることである。そのために、以下の2つのことをおこなう。まず、わが国の大学におけるSA制度の目的や動向を概観する。その後、教員養成大学で実際に行われたピアノ初心者ゼミにおけるSAの活用の実例を取り上げる。それらを踏まえて、大学におけるSAの有効性について検討する。

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the effectiveness of Student Assistants (SA) in universities. To that end, I did the following two things. First, I reviewed the purpose and trends of the SA system in Japan universities. After that, I took up an example of the use of SA in a piano seminar for beginners held at a teacher's training college. Based on these findings, I examined the effectiveness of SA in universities.

1. はじめに

わが国の大学においてSA制度が導入されるきっかけとなったのは、平成12年6月文部省高等教育局で廣中平祐氏が座長を務めた「大学の学生生活の充実に関する調査研究会」が作成した「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」という報告書¹、通称「廣中レポート」である。この報告書において、「現在、各大学においては、優秀な大学院学生に、教育的配慮の下に、ティーチング・アシスタント（TA）として学部学生などに対する教育の補助業務を担当させている例が見られる。これからは、学生の希望に応じ、大学院学生だけでなく学部の上級生についても、このような機会を積極的に与えていくことが望まれる。また、ティーチング・アシスタント（TA）のように授業の補助を行うだけで

1 文部科学省高等教育局医学教育課平成12年6月報告書「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm) (2023.8.21参照)

はなく、下級生の学生生活全般にわたる指導や相談に上級生を当たらせたり、学生を学内における様々な業務にたずさわらせるなど、各大学においてその範囲や方法を検討した上で、学生を有効に活用する工夫が期待される。」と明記されている。また、立川(2013)²はこの報告書について、大学の大量化に伴って多様な学生が入学してくる状況を見据えて、「大学はより学生の視点に近い位置に立ち、学生に対する教育・指導の充実やサービス機能の向上に努めることが重要」とした上で、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への転換を提言したものであると述べている。さらに、各大学における改善方策の1つとして挙げられたのが、正課教育および正課外教育において、学生に対する教育・指導に学生自身を活用することであったと記している。

また、平成21年1月の中央教育審議会答申の概要「学士課程教育の構築に向けて」³では、教育方法の改善として、学習意欲や目的意識の希薄な学生に主体的に学ぶ姿勢・態度を持たせることが重要であり、双方向型授業や能動的活動に参加する機会を設けるなど、各大学は改めて教育方法の点検・見直しをすることが必要であると示された。具体的に、大学に期待される取組として、双方向型の学習の展開、ティーチング・アシスタント(TA)、スチューデント・アシスタント(SA)の積極的活用、少人数指導の推進、情報通信技術の活用などが挙げられている。

さらに、平成30年の中央教育審議会答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」⁴では、「保証すべき高等教育の質」として「何を学び、身に付けることができるのかが明確になっているか」、「学んでいる学生は成長しているのか」、「学修の成果がでているのか」、「大学の個性を発揮できる多様な魅力的な教員組織・教育課程があるか」といったことが重要な要素として列記されている⁵。つまり、「学習者を中心に据えた教育の在り方」と「多様な大学の在り方」を具体化し、対外的に示していくことの重要性が指摘された。この2040年に向けた高等教育の課題と方向性を踏まえ、現在の大学設置基準を時代に即したものとして、例えば、教育手法、教育課程を踏まえた教員組織の在り方など、抜本的に見直す必要があるとされている。その見直しの議論において「4つの見直しの視座」⁶が示されたが、そのうちの「客観性の確保」において「教員だけではなく、TA(ティーチング・アシスタント)やSA(スチューデント・アシスタント)などの教育補助者も授業に参画できるよう、大学設置基準上、教育を補助する者について明示的に規定する。」との言及もある。

以上のように、大学等の教育研究活動への学生の参画を促す仕組みとして、学生が大学等の意志決定に参画する機会を設けたり、学生をTAやSAなどの教育サポートスタッフとして活用したりすることが、「学習者を中心に据えた教育の在り方」や「多様な大学の在り方」を図る上で重要であることは言うまでもない。

2 立山博邦(2013)「大学におけるスチューデント・アシスタント(SA)制度の考察—日米比較の視点から—」、『社会システム研究』第26号, pp.137-150

3 研究振興局振興企画課「学士課程教育の構築に向けて」, 平成21年1月20日学術分科会配布資料(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm) (2023.12.20参照)

4 中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」, 平成30年11月26日(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm) (2023.12.20参照)

5 中央教育審議会大学分科会質保証システム部会「資料1-2_質保証システムの見直しについて(素案)」, 令和4年1月7日配布資料(https://www.mext.go.jp/content/20220112-mxt_koutou01-000019840_1-2.pdf) (2023.12.20参照)

6 4つの見直しの視座として、①客観性の確保、②透明性の向上、③先導性・先進性の確保(柔軟性の向上)、④幻覚性の担保、が示されている。(同前書, p10)

そこで、本稿では、広島文教大学（以下、本学）で実際に行われているSAの活用の一例を取り上げ、それらの取組におけるSAの有効性について学生へのアンケート調査の結果を基に示唆を得ることとする。

2. SAを活用したピアノ初心者ゼミの取組

2.1 ピアノ初心者ゼミの概要

現在、本学では、「広島文教大学スチューデントアシスタント取扱要項（平成31年4月1日施行）」⁷および「広島文教大学スチューデントアシスタント選考内規（令和4年1月1日施行）」⁸に基づいて、SAを運用している。本学には、これらの要項や内規に基づきSAを活用している事例は複数あるが、本稿においては、SAを活用したピアノ初心者ゼミを取り上げることとする。

本学教育学部教育学科には教職課程が設置されており、初等教育専攻において保育士・幼稚園教諭及び小学校教諭の養成、中等教育専攻において中学校教諭・高等学校教諭の養成を行っている。特に初等教育専攻に入学する学生は、そのほとんどがピアノを必要とする保育士・幼稚園教諭・小学校教諭などの職業を目指すことになる。1年次前期の専門科目では音楽理論を学び、それと並行してピアノ実技のレッスンも行っているが、例年、ピアノ経験者の学生とピアノ初心者の学生の差は歴然であり、週1回の授業だけではなかなか技術向上が望めない。また、ピアノ初心者は練習の方法すらもわかっておらず、空き時間に1人での練習は困難である。さらに、本学は平成31年4月より男女共学に移行して以降、入学生の層も変化し、保育・教育活動を行う上で必須のピアノ演奏の初心者が増え続けている。現に、ここ4年間の初等教育専攻の入学生のピアノ初心者の割合は、令和2年度が37%、令和3年度が44%、令和4年度が52%、令和5年度が60%と、顕著に表れている。入学生の2人に1人以上がピアノ初心者の現在、正規の授業のみでは時間的にも不十分で、その後の学修の基礎となる力を付けきることができず、さらなる個別指導を必要とする学生が出てくることは明らかであった。そうした学生を対象に、本学では毎年授業とは別枠でピアノ初心者ゼミを開講し、徹底した個別指導を行うこととしている。こうした取組を通して、実践力をもった教育・保育者を育成するという教育学部の人材育成目標を達成していくよう努めている。

ピアノ初心者ゼミは、前期と後期の2期に渡り開講しているが、それぞれで受講条件を変えている。前期は1年生のピアノ初心者のみを対象とし、後期は1年生から3年生までのピアノ初心者および希望者を対象とすることで、2年次以降の学びの機会も保障している。現在は、この両期のピアノ初心者ゼミにおいてSAを活用している。ここで採用されるSAは、本学の選考内規第2条第1項にある「SAは、本学大学院又は学部在籍する者で、以下の要件を満たす者とする。（1）授業における指導及び補助的業務にあたっては、SA採用時の通算GPA値が3.0以上で当該評価が「秀（S）」である者、または当該授業担当教員及び学科長が業務遂行能力があると認めた者。」⁹に基づいて選ばれた学士課程4年生が採用されている。近年のピアノ初心者ゼミの具体的な実施状況を表1に示す。

7 広島文教大学「広島文教大学スチューデントアシスタント取扱要項」（平成31年4月1日施行）

8 広島文教大学「広島文教大学スチューデントアシスタント選考内規」（令和4年1月1日施行）

9 同前書8

表1 近年のピアノ初心者ゼミの受講者数等

年度	R5	R4	R3	R2
SA人数	10名	10名	10名	9名
【前期】 受講者数 ※1年生のみ (1年在学生に おける割合)	78名 (60%)	70名 (51.9%)	61名 (43.9%)	49名 (38%)
【前期】 SA1人あたり の担当学生数	7～8名	7名	6～7名	5名～6名
【後期】 受講者数 ※1～3年生	(1年生)56名 (2年生)4名 (3年生)4名 計64名	(1年生)25名 (2年生)12名 (3年生)12名 計49名	(1年生)32名 (2年生)9名 (3年生)16名 計57名	(1年生)17名 (2年生)21名 (3年生)11名 計49名
【後期】 SA1人あたり の担当学生数	6～7名	4～5名	5～6名	4～5名

2.2 ピアノ初心者ゼミに関するアンケート調査の概要

令和5年7月24日～7月31日の期間に、令和5年度前期のピアノ初心者ゼミの受講者にアンケート調査¹⁰をおこなった。調査の目的は、ピアノ初心者ゼミの取組成果と課題を把握するとともにSAの効果を探ることである。アンケートはMicrosoft Formsを使用し、QRコードを各自のiPadやスマートフォンの端末から読み取って回答するオンライン形式で実施した。調査対象者は、令和5年度前期ピアノ初心者ゼミの受講者である1年生78名である。受講者用のアンケート項目は、所属・氏名・参加状況・SAに対する評価・ゼミの評価とその理由・ゼミに関する感想の自由記述で構成した。回答有効数は72件であった。なお、ピアノ初心者ゼミで採用されたSAは10名であり、SA一人あたりが担当した受講者は表2の通りである。

表2 SAが担当した受講者数

	SA①	SA②	SA③	SA④	SA⑤	SA⑥	SA⑦	SA⑧	SA⑨	SA⑩
担当数	8名 (4)	8名 (3)	8名 (2)	7名 (2)	7名 (4)	8名 (7)	8名 (2)	8名 (6)	8名 (3)	8名 (6)

※(男子学生の内訳)

10 倫理的配慮については、アンケート調査に「統計的に処理し回答者個人が特定されることはない」と明記した。また、アンケート調査実施の際に、その意図と目的を説明し、「アンケートの回答は任意であり、プライバシーの保護、匿名性の保証、研究目的以外には使用しない」とアンケート内の文言および口頭で説明し回答者から承諾を得ている。

2.3 調査結果

アンケート調査の結果を示す。

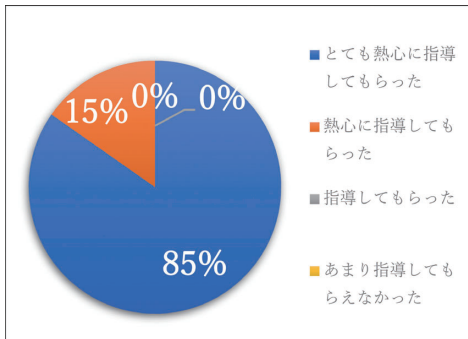


図1 ピアノ初心者ゼミへの参加状況

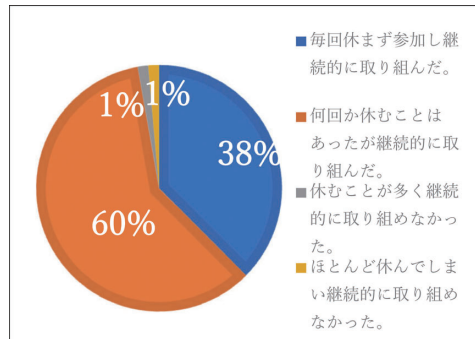


図2 担当SAへの評価

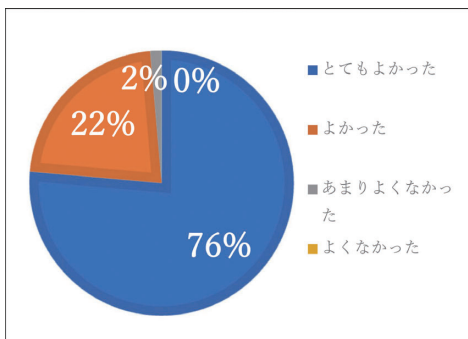


図3 ピアノ初心者ゼミを受講した感想

図1より、ピアノ初心者ゼミへの参加状況については、98%の学生が継続的に取り組むことができたと回答しており、概ね良好であった。また、図2より、100%の受講者がSAへの評価を肯定的に捉えていることがわかる。さらに、図3より、ピアノ初心者ゼミへの参加を肯定的に捉えた学生は98%であり、多くの学生がピアノ初心者ゼミへの評価が高かったと言える。

次に、図3「ピアノ初心者ゼミを受講した感想」を4件法で尋ね、その回答に対する理由についての結果を述べる。ピアノ初心者ゼミに参加して「とてもよかった」と回答した受講者は55名(76%)、「よかった」と回答した受講者は16名(22%)、「あまりよくなかった」と回答した受講者は1名(2%)、「よくなかった」と回答した受講者は0名(0%)であった。このうち、「とてもよかった」・「よかった」と肯定的な回答をした受講者の理由については表3および表4、「あまりよくなかった」と否定的な回答をした受講者の理由については表5に示す。記述内容はKJ法による質的分析法に依拠し、類似性・異質性に基づき重要な語句ごとに分節化とカテゴリ化、構造化を行った。

表3 ピアノ初心者ゼミへ参加して「とてもよかった」と回答した理由

※回答項目数, 回答者55名に対して回答者の記述論点が59項目

順位	「とてもよかった」と回答した理由	回答項目数 (N=59)
5	SAや仲間との親和性	2
2	SAの対応やふるまい	16
3	練習時間の確保・習慣化	11
1	技術の習得・向上	27
4	その他	3
	計 (件)	59

表4 ピアノ初心者ゼミへ参加して「よかった」と回答した理由

※回答項目数, 回答者16名に対して回答者の記述論点が16項目

順位	「よかった」と回答した理由	回答項目数 (N=16)
3	SAの対応やふるまい	4
1	練習時間の確保・習慣化	5
1	技術の習得・向上	5
4	その他	2
計 (件)		16

表5 ピアノ初心者ゼミへ参加して「あまりよくなかった」と回答した理由

※回答項目数, 回答者1名に対して回答者の記述論点が1項目

「あまりよくなかった」と回答した理由	回答項目数 (N=1)
その他	1
計 (件)	1

「とてもよかった」と回答した理由(表3)の1位は、『技術の習得・向上』であった。続いて『SAの対応やふるまい』、『練習時間の確保・習慣化』となった。『技術の習得・向上』に関する記述のなかで、「一つ一つ丁寧に教えてもらえて、初心者ゼミが終わったら弾ける曲が増えたから。(A8)」、「ピアノ初心者で楽譜の読み方も分からなかった私に、ピアノの弾き方、楽譜の読み方など一から丁寧に教えてくださり、ピアノが弾けるようになったから。(A9)」、「先輩が優しくピアノがちょっと好きになったから。出来る曲が増えたから。(A10)」、「自分ではわからないところがたくさんあったため、何度も丁寧に教えてもらい全ての曲に表現をつけながら上手く弾くことができたからです。(A11)」、「全くピアノが出来なかったが毎回教えてもらうことで上達したりピアノに対してのモチベーションが変わったから。(A32)」、「とても優しく教えていただき100番をひくことができたから。(A37)」の以上の7件については、『SAの対応やふるまい』にも関連する語句(論点)が見られた。また、「ピアノ初心者の私にとって練習時間を確保できる機会であったし、自分では気づけないミスを指摘してもらうことで改善ができたから。(A37)」の1件に関しては、『練習時間の確保・習慣化』に関連する論点が見られた。

「よかった」と回答した理由(表4)の1位は同率で『練習時間の確保・習慣化』と『技術の習得・向上』であった。続いて『SAの対応やふるまい』であったが、1位と3位との回答項目数の差は1件のみであり、順位によって大きな隔たりは見られなかった。『練習時間の確保・習慣化』に関する記述には、「ピアノを弾く習慣がついたから。(A58)」、「自分で練習時間を取れないので、ピアノゼミがあることで練習できた。(A62)」との回答が見られた。『技術の習得・向上』に関する記述には、「わからなかったリズムを弾けるようになったから。(A65)」、「ピアノ初心者だった自分が通う度に実力がついたと実感することができたから。(A67)」との回答が見られた。また、『SAの対応やふるまい』に関する記述には、「難しい箇所を丁寧に教えていただけたから。(A54)」、「先輩が、実際に上下どちらかだけ補助で弾いてくれたりして、その譜面の感覚がつかみやすかった。(A56)」との回答が見られた。

「あまりよくなかった」と回答した学生は1名であり、その理由(表5)については、「上達し

たと思うが弁当を作らないといけなくなった。(A70)」と記していた。ピアノ初心者ゼミの開講時間に関連する内容として、『その他』とした。

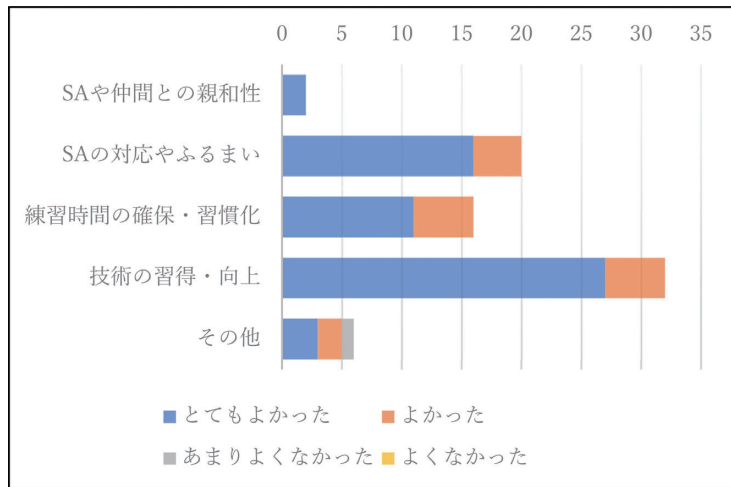


図4 ピアノ初心者ゼミを受講した感想(4件法)の回答理由における各論点の件数

続いて、ピアノ初心者ゼミへの感想を各論点別に件数で表したものが、図4である。最も件数が多かった論点は『技術の習得・向上』で32件、次に『SAの対応やふるまい』が20件、『練習時間の確保・習慣化』が16件、『その他』が6件、『SAや仲間との親和性』が2件であった。このことから、ピアノ初心者ゼミの受講者は、自身の技能が向上したことに起因してゼミを評価する傾向にあることがわかった。

また、アンケート調査の最後の項目に、ピアノ初心者ゼミの感想を自由記述で回答してもらった。回答有効数は72件であった。72件中、SAに関する記述内容が見られた回答は45件であり、残り27件については、ピアノ初心者ゼミそのものの感想に関する論点が見られた。これらの結果を図5、図6に示す。

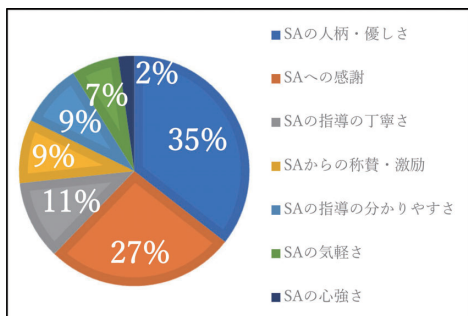


図5 SAに関する感想に見られた論点の
カテゴリ別_内訳 ※SAに関する感想45件の回答

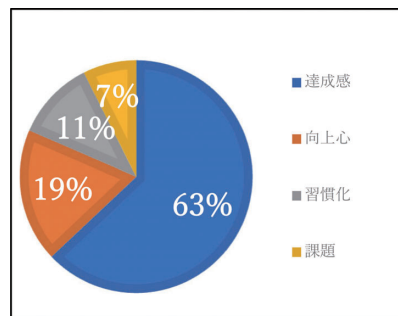


図6 ゼミの感想に見られた論点のカテゴリ
別_内訳 ※SAに関する感想以外の27件の回答

ピアノ初心者ゼミについての感想では、72件中45件(62.5%)がSAに関する記述が確認されたが、その中で最も回答が多かった論点は、『SAの人柄・優しさ』(35%)、続いて『SAへの感謝』(27%)であった。具体的には、「いつもSAの先輩が優しく指導してくださって苦手だった

ピアノが好きになりました。少しずつできることが増えてとても楽しかったし、継続して頑張りたいと思いました。(A41)」、「優しく教えてくださったのでわからないことも聞きやすかったです。(A28)」、「先輩が優しく教えてくれて行きやすかったです。(A35)」等の回答が見られた。また、『SAへの感謝』に関しては、「先輩のおかげで」や「ありがたい」という記述のカテゴリとして整理した。具体的には、「SAの先輩が、毎回の授業の中でリズムがわからないところや指番号がぐちゃぐちゃになってしまった時に、その点について優しく丁寧に教えてくださり本当に何度も助けていただいたため、感謝の気持ちでいっぱいです。お忙しい中、このような機会を設けてくださり本当にありがとうございました。(A3)」、「先輩のおかげでピアノが少し弾けるようになってよかったです。ありがとうございます。ピアノが弾けるようになったので、参加して良かったと思います。(A8)」等の回答が見られた。また、SAに関する感想以外の回答は27件(37.5%)であったが、その中で最も多かった論点は『達成感』(63%)、続いて『向上心』(19%)、『習慣化』(11%)であった。その他、自分のこれからの課題について2件(7%)の回答が見られた。具体的には、「初心者ゼミに入ったことで、ピアノが全くできなかった自分がバイエルの70番を弾くことができるまでになりました。本当にありがとうございました。今後はもっと難しい曲を弾いていけるように、毎日ピアノに触れ、技術を向上させていけるように精進していきたいと思います。(A69)」、「自分の課題を見つけることが出来たので良かった。(A53)」等、全ての受講者が肯定的な感想を述べていた。ピアノ初心者ゼミについては、受講者の6割以上の学生がSAに関する感想を抱えており、教員よりも身近な存在であるSAに聞くことができる気軽さや、徹底した個別指導と受講者への前向きな言葉かけが、受講者の達成感や満足感に繋がっていることがわかった。このように、SAの存在が受講者の心理的なサポートになるとともに、技能面での向上にも寄与していることが顕著となる結果であった。

3. 終わりに

本稿の目的は、本学におけるSAの活用の一例を取り上げ、それらの取組におけるSAの有効性について学生へのアンケート調査の結果を基に示唆を得ることであった。調査の結果、SAの存在と関わりが受講者の心理的側面と技能的側面の両方に有効に働いていることがわかった。一方、SAのふりかえりにも、「1年生が何もかも初めての中で、毎回出席してくれることがとても嬉しく、週1回というわずかな時間だったが、かけがえのないひとときを過ごすことができた。「ここまでは、できるようになりました」や「〇番は合格できたんです!」という言葉がいつも聞くことができ、私も1年生の喜びに寄り添うことができた。私自身ピアノについて、的確な技術の指導ができたのか不安だが、ピアノを通じて、1年生と出会えて色々な話ができて良かったと思う。(SA1)」、「1年生が毎週上手にピアノを弾けるようになっているのを実感でき、自分のピアノに対しての意欲が上がった気がする。「分かるようになりました」や「悩みが解決しました」という声を受けてすごくやりがいを感じた。(SA2)」との記述を始めとし、10名全てのSAが、「やりがい」や「自分自身の技術や意欲の向上」について言及していた。この実態からも、SAの活用は受講者のメリットのみならず、SAと受講者との双方向的な効果が期待できることが伺えた。

今後も、このようなSAの活用が、「学習者を中心に据えた教育の在り方」や「多様な大学の在り方」に如何に寄与するのかということについて、検証を続けていきたいと考える。